

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第271集

周防畑遺跡群

DAIZUDA

大豆田遺跡Ⅶ

長野県佐久市長土呂大豆田遺跡Ⅶ発掘調査報告書

2020.3

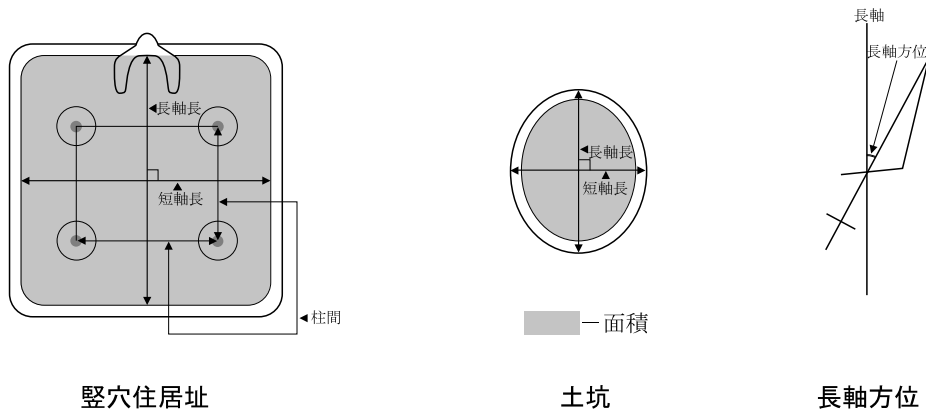
佐久市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する周防畑遺跡群大豆田遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は株式会社カウベルエンジニアリングが行う駐車場整備工事に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅶ(NSOⅦ)  
佐久市長土呂1737、1738
- 4 調査期間及び面積 発掘調査：令和元年7月16日～25日  
整 理：令和元年7月26日～令和2年3月  
調査面積：145.8㎡
- 5 本書に掲載した地図は佐久市役所発行の地形図(1:50,000)である。
- 6 遺構測量はTSを用い3次元データを取得した。取得したデータは株式会社CUBICの「遺構君」により図化した。図面トレースは「遺構君」で行い、Adobe Illustratorで調整した。写真はデジタル一眼レフカメラで撮影しAdobe Photoshopで補正等を行った。編集はAdobe InDesignで行った。
- 7 本書の作成・編集は小林が行った。
- 8 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 挿図の縮尺は遺構1/80、遺物1/4(鉄器・鉄製品は1/2)を基本とするが、これ以外の物は図中に縮尺を記した。
- 2 海拔標高は、水系標高をスケールに「標高」として記してある。また、土色の色調は1999年版「新版標準土色帖」に基づいた。
- 3 遺構の計測値は図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。



- 4 挿図中の網掛けは以下の表現である。



## 目 次

例言	
凡例	
目次	
第Ⅰ章 調査の経緯	1

第1節 経過と立地	1
第2節 調査体制	1
第3節 検出遺構・遺物の概要	2
第Ⅱ章 遺構と遺物	2
第1節 住居址	2
第2節 土坑	9
第3節 ピット	9
第4節 溝址	9
第Ⅲ章 まとめ	10
表	13
図版	16
抄録・奥付	

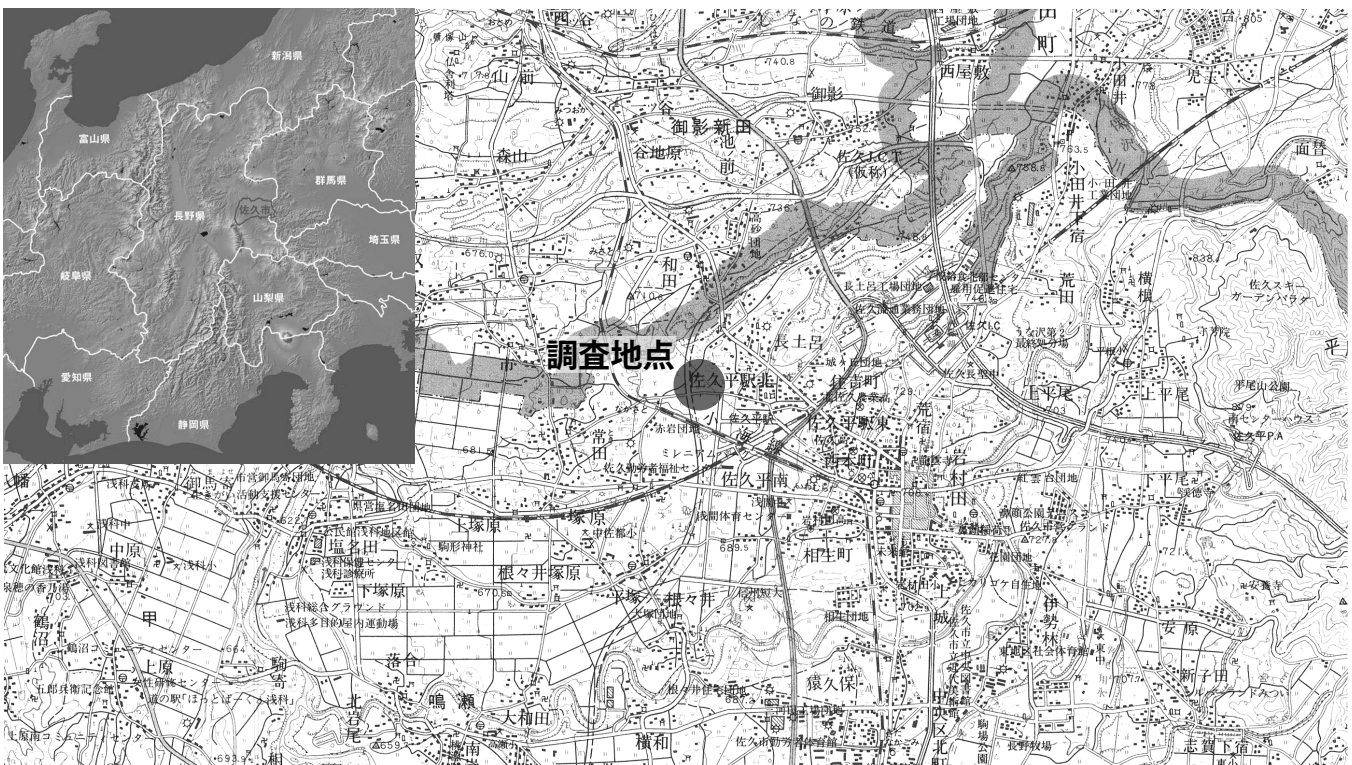
# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 経過と立地

大豆田遺跡Ⅶは佐久市長土呂地籍に所在する。遺跡は田切に挟まれた台地の末端部に立地する。遺跡内では過去に、佐久市教育委員会による6次に及ぶ発掘調査が実施され、何れの調査に於いても数多くの遺構・遺物が検出されている。

今回、遺跡内で株式会社カウベルエンジニアリングにより駐車場整備工事が計画されたことから、遺跡の保護を目的とし、状況を把握するための試掘調査を令和元年7月5日に実施した。その結果、住居址等の遺構が検出されたため、遺構の破壊が予測される擁壁部分について記録保存を目的とした発掘調査を行い、その他の部分については埋土保存とした。

## 第2節 調査体制



第1図 大豆田遺跡Ⅶの位置 (1 : 50,000)

調査受託者	佐久市教育委員会	教 育 長	榑澤晴樹
事務局	社会教育部	部 長	青木 源
	文化振興課	課 長	東城 洋
		企 画 幹	吉田 晃
	文化財調査係	係 長	山本秀典
		係	小林眞寿 富沢一明 上原 学
			久保浩一郎(2019年11月まで)
			羽毛田卓也
		調査担当者	小林眞寿
		調 査 員	甘利隆雄 岩松茂年 小林喜久子
			小林節子 小林敏雄 花岡美津子
			堀籠滋子 宮川真紀子 山口ひとみ
			柳澤千賀子 山田叔正 油井満芳

### 第3節 検出遺構・遺物の概要

遺構 竪穴住居址 13軒 土坑 6基 溝址 1条 ピット 8基  
遺物 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 石器・石製品 鉄器

## 第Ⅱ章 遺構と遺物

### 第1節 住居址

#### ●H1号住居址(第3図)

調査区西北部分で検出された。M1号溝址に切られ、東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。



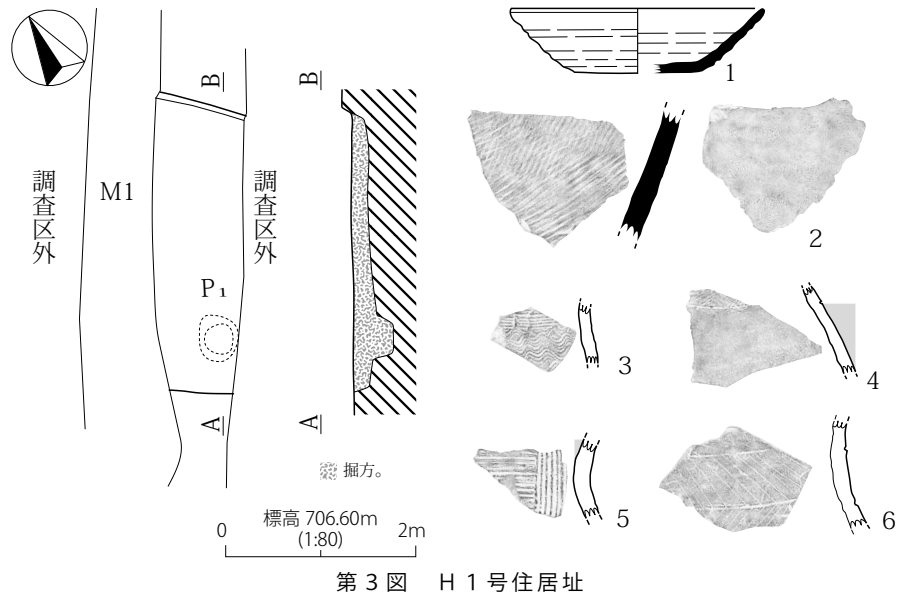
第2図 調査地点周辺の過去の調査位置(1:2,500)



壁残高0.11mの規模を有する。周溝は存在しない。ピットは掘方から1基検出された。

遺物は須恵器、弥生土器が出土している。須恵器は坏と甕が各1点出土している。坏の口クロからの切り離しは回転糸切である。甕は体部片であり、外面には平行叩目、内面はナデ調整により当具痕を消去している。弥生土器は甕1点と壺3点が出土している。全て破片である。甕は頸部に櫛描簾状文が巡り、体部には櫛描波状文が施される。壺は4・5が頸部に矢羽根状文が、6には櫛描「T」字文が施され、4・5には赤彩が認められる。

以上の出土遺物の内、須恵器2点は重複するM1号溝址からの混入品であり、本址は小山編年の弥生時代後期Ⅲ期新の所産と考えられる。



第3図 H1号住居址

#### ●H2号住居址(第4図)

調査区西南端で検出された。M1号溝址に切られる。北・東方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高0.28m以外の規模は不明である。2基検出されたピットのうちP1は主柱である。P2内からは多くの土器が出土したが性格は不明である。東壁下には周溝が巡らされていた。

遺物は弥生土器と黒曜石製の石鏃が出土している。器種的には高坏、甕、壺が認められた。高坏は脚部のみの出土である。脚端部があまり屈折しない形態で、外面には赤彩が施される。甕は頸部に櫛描簾状文が施され、体部と口縁部には櫛描波状文が施される2～7と櫛描斜走文が施される8が存在する。また、4は口縁部が折返である。壺は口縁部の内外面と、頸部を除く外面体部に赤彩が施される。頸部には横位の文様帯があり、13は櫛描「T」字文が、12は平行沈線間に櫛描波状文が施されている。

以上の出土遺物の特徴から、本址は小山編年の弥生時代後期Ⅲ期新の所産と考えられる。

#### ●H3号住居址(第5図)

調査区南端中央付近で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.44mの規模を有する。壁下には断続的に周溝が巡っている。1基検出されたピットは棟持柱と思われる。北壁中央の壁下にはベンガラが散布していた。

遺物は弥生土器と石器が出土している。弥生土器には甕と壺の器種が認められる。甕には櫛描波状文が施されるもの1・2と、櫛描斜走文が施されるもの3、縄文が施されるもの4が存在する。1は折返口縁である。壺は小型の無頸壺と思われる5と、大型で頸部に横位の櫛描文が施される6、ヘラによる多段の矢羽根状文が施される7が存在する。5・7には赤彩が認められる。石器は磨石が1点出土している。

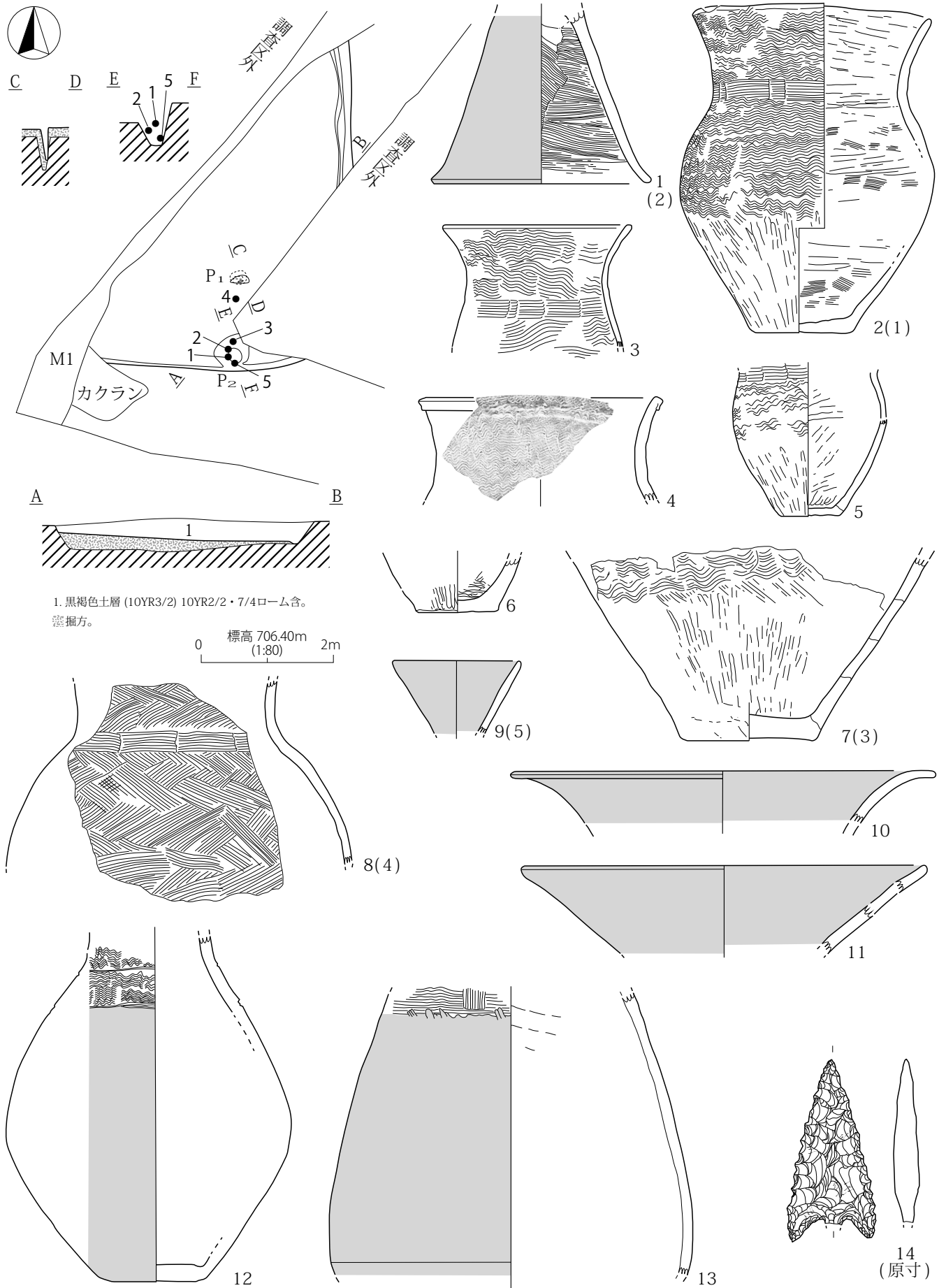
以上の出土遺物から、本址は小山編年の弥生時代後期Ⅲ期新の所産と考えられる。

#### ●H4号住居址(第6図)

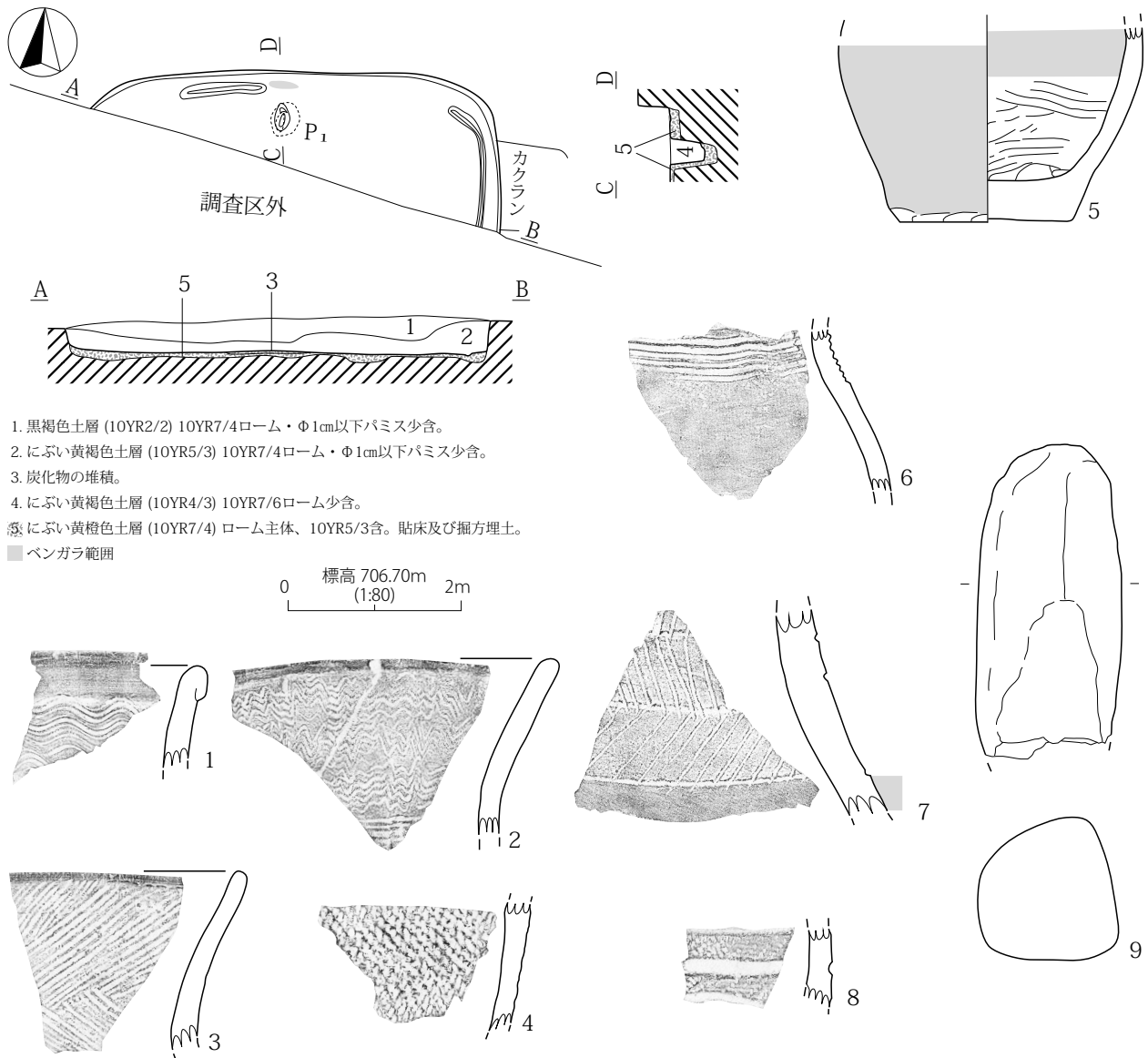
調査区南端中央東よりで検出された。西南隅が検出されただけであるため、全容は不明である。検出範囲にはピット等は存在しなかった。

遺物はほぼ皆無であった。

本址の所産期は不明である。

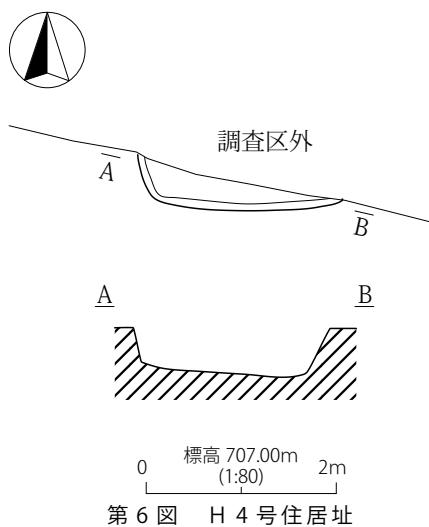


第4図 H2号住居址



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4ローム・Φ1cm以下バミス少含。
  2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR7/4ローム・Φ1cm以下バミス少含。
  3. 炭化物の堆積。
  4. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム少含。
  5. にぶい黄橙色土層 (10YR7/4) ローム主体、10YR5/3含。貼床及び掘方埋土。
- ベンガラ範囲

第5図 H3号住居址



第6図 H4号住居址

● H5号住居址(第7図)

本址は調査区東南端で検出された。北側に調査区外に延びるため全容は不明である。H12号住居址を切っている。N-29°-Wに長軸方位をとり、壁残高0.11mの規模である。ピット2基、土坑1基が検出されている。土坑は掘方から検出された。

遺物は土師器、灰釉陶器、鉄製品が出土している。土師器には坏1~7、ロクロ甕17の器種が認められる。坏のロクロからの切り離し方法は回転糸切である。内面調整はヘラミガキ→黒色処理であるが、6・7はナデ調整で黒色処理は施されない。7には外面に墨書が認められる。ロクロ甕は口縁部の破片である。灰釉陶器は碗の破片であり、底部を欠損する。鉄製品は釘が2点D1内から出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代VI期に比定され、9世紀後半の実年代が想定される。

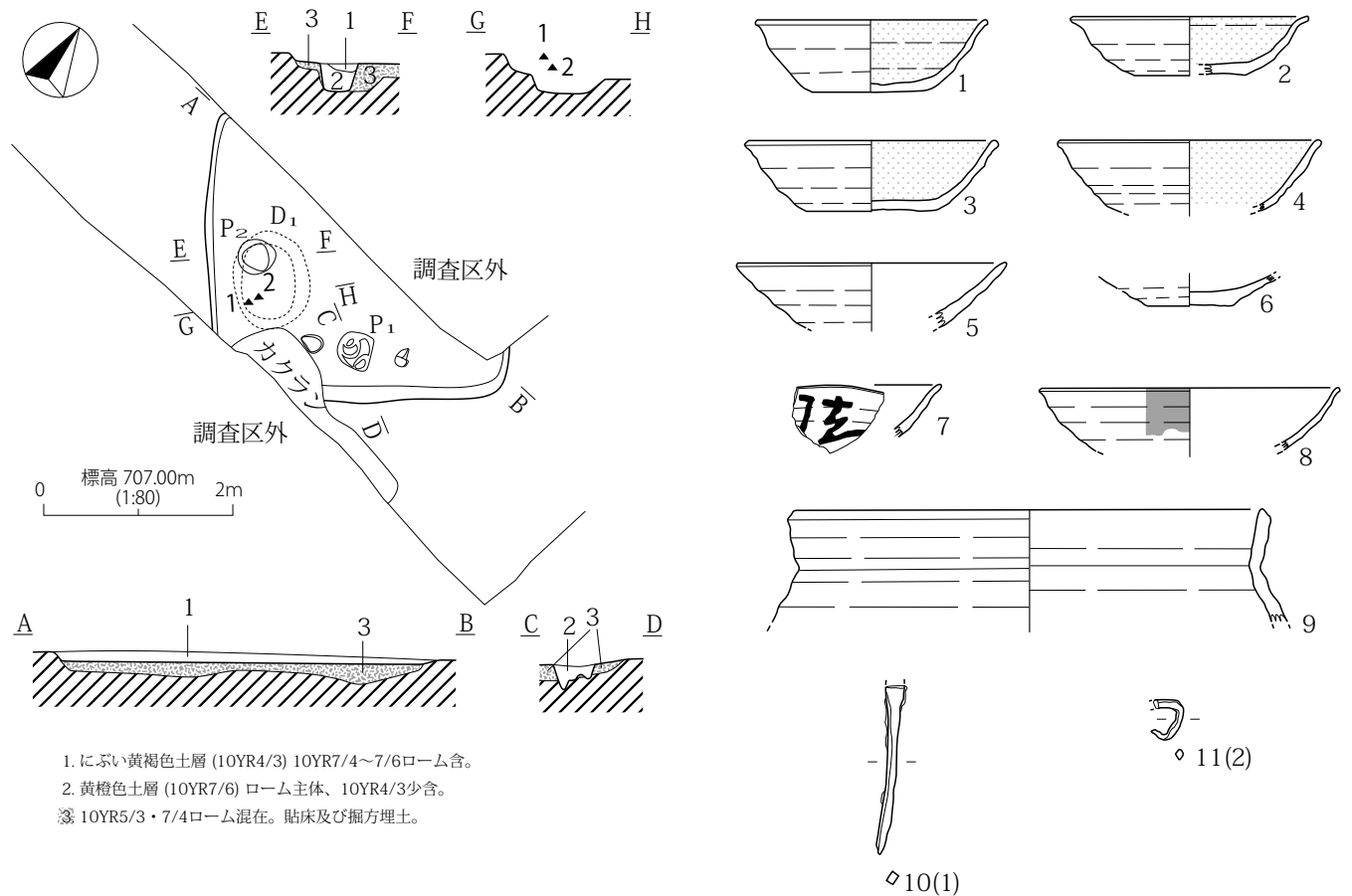
● H6号住居址(第8図)

本址は調査区東南端で検出された。H12号住居址を切る。東方向に調査区外に延びるため全容は

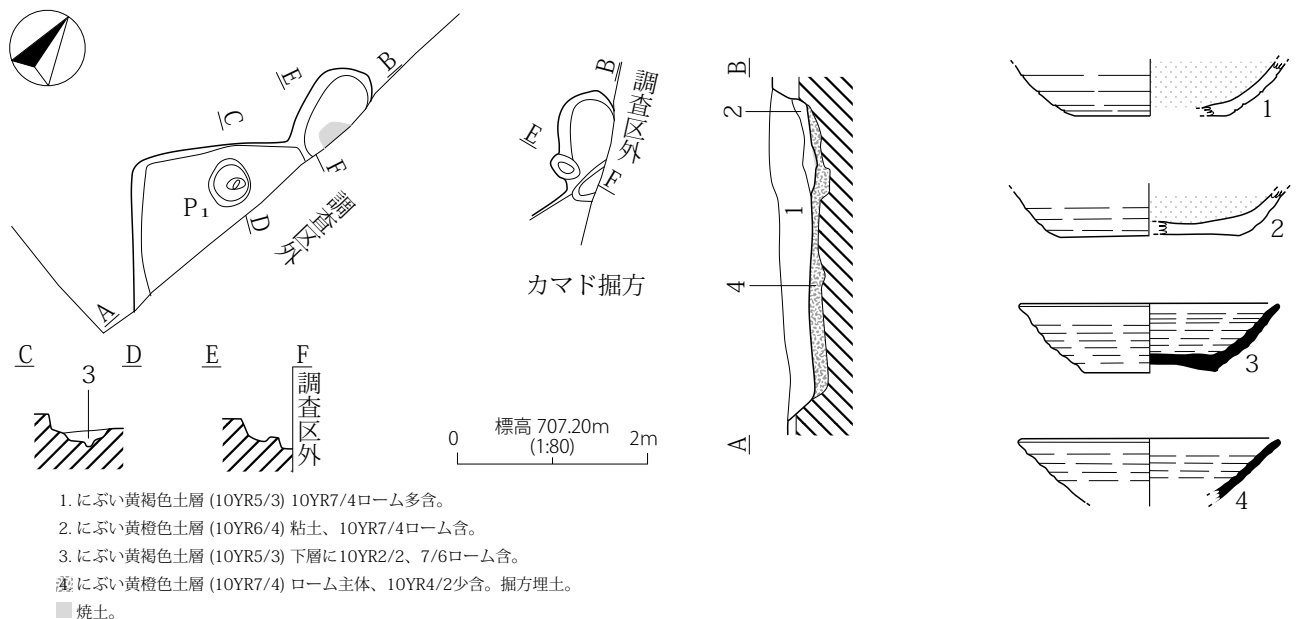
不明である。壁残高0.40mの規模である。カマドは北壁の中央と思われる部分に存在したが、掘方状態に破壊されていた。1基検出されたピットの性格は不明である。

遺物は土師器、須恵器が出土している。土師器は2点共に坏であり、内面にはヘラミガキ後黒色処理が施されている。外底は1がヘラケズリ、2が回転糸切である。須恵器も2点共に坏であり、底部が残存する3は、右回転の糸切痕が看取できる。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅴ期に比定され、9世紀前半の実年



第7図 H5号住居址



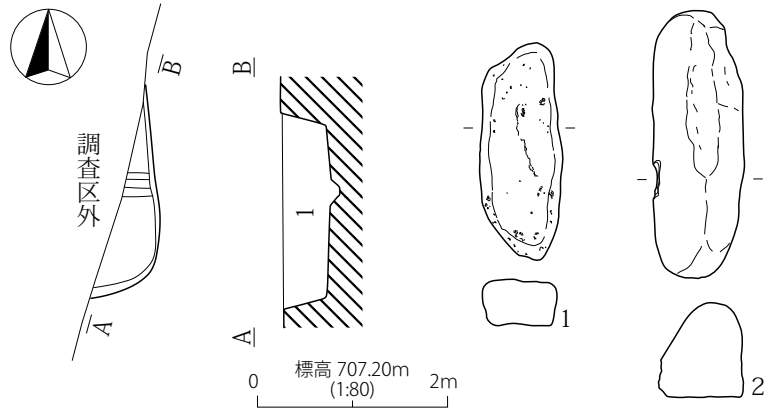
第8図 H6号住居址

代が想定されている。

● H 7号住居址(第9図)

本址は調査区東端中央で検出された。H13号住居址を切っている。東南隅が検出されただけであり、全容は不明である。壁残高0.49mの規模である。間仕切と思われる溝が検出されている。

遺物は、編物石が2点出土した。  
本址の所産期は不明である。



1. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR7/4ローム・4/2粒子含。

第9図 H 7号住居址

● H 8号住居址(第10図)

本址は、H7号住居址の北隣に検出された。北東隅が検出されただけであり全容は不明である。壁残高0.10mの規模である。調査範囲にピット等は存在しなかった。

遺物は土師器が出土している。碗と甕の器種が認められる。碗のロクロからの切離は回転糸切であり、高台は付高台である。内面は1がナデ、2が暗文後黒色処理である。甕はロクロ甕である。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代のⅦ期に比定され、10世紀前半の実年代が想定される。

● H 9号住居址(第11図)

本址は調査区東南端やや北で検出された。H6号住居址に切られる。東・西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.22mの規模である。調査範囲にはカマドは存在しなかった。ピットは5基検出されているが、支柱穴は判然としない。

遺物は土師器、須恵器、石器が出土している。土師器は碗と甕が各1点出土した。碗は、内面が暗文後黒色処理、外面が回転糸切後付高台である。甕はロクロ甕である。須恵器は2点共に坏である。底部が残存する3は回転糸切によりロクロから切離されている。石器は磨石が1点出土している。

以上の出土遺物から、本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅵ期に比定され、9世紀代後半の実年代が想定される。

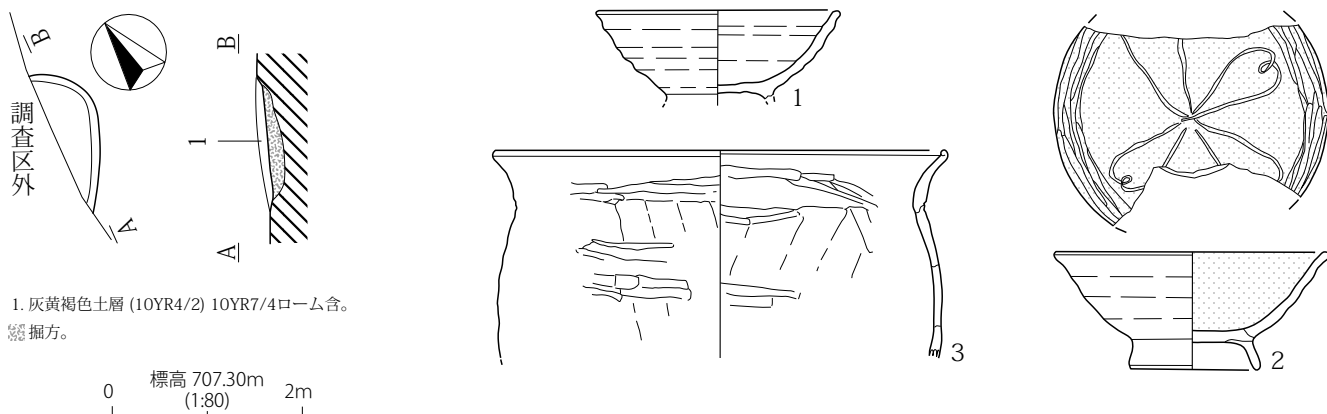
● H 10号住居址(第12図)

本址は調査区東端中央付近で検出された。東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.16mの規模である。調査範囲にピット等は存在しなかった。

遺物は皆無であり、本址の所産期は不明である。

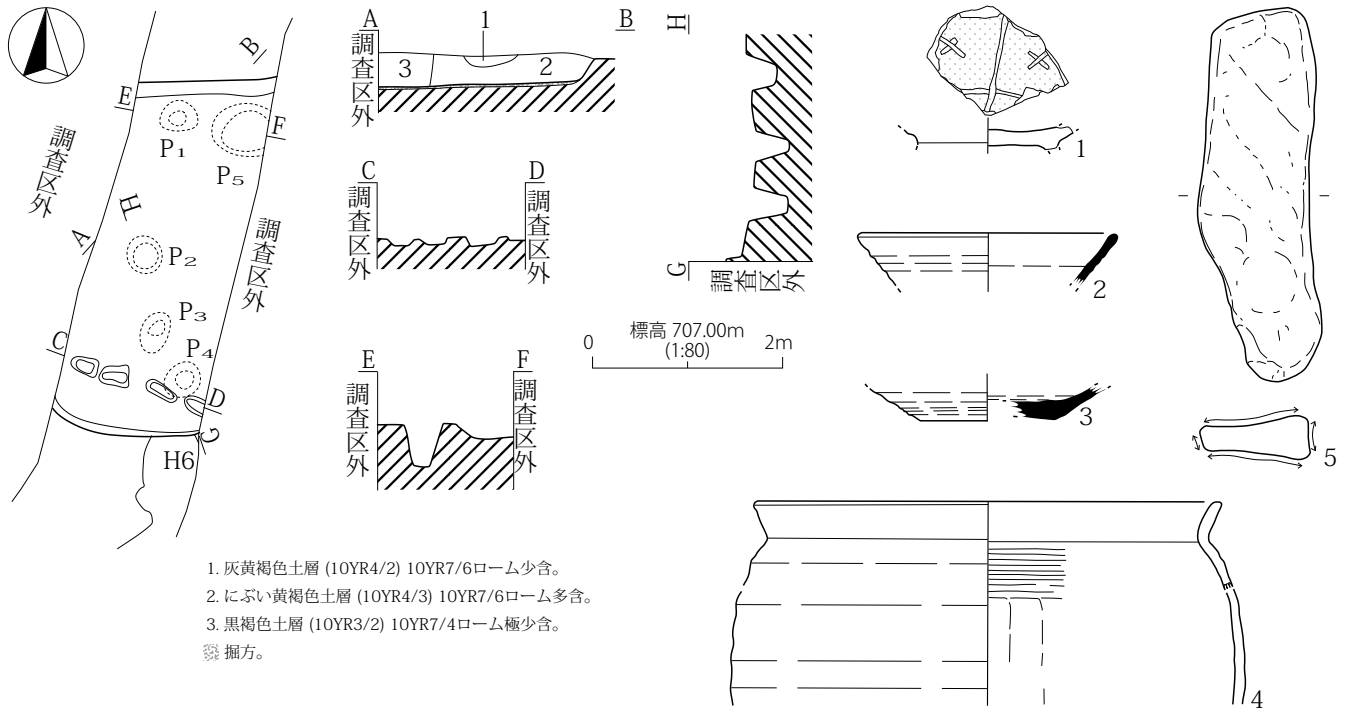
● H 11号住居址(第13図)

本址は調査区北東端で検出された。D2号土坑に切られる。北方向に調査区外に延びるため全容



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/4ローム含。  
総掘方。

第10図 H 8号住居址



第 11 図 H 9 号住居址

は不明である。壁残高0.48mの規模である。調査範囲にはピット等は存在しなかった。

遺物は底部回転ヘラ切の須恵器坏片が1点出土した。

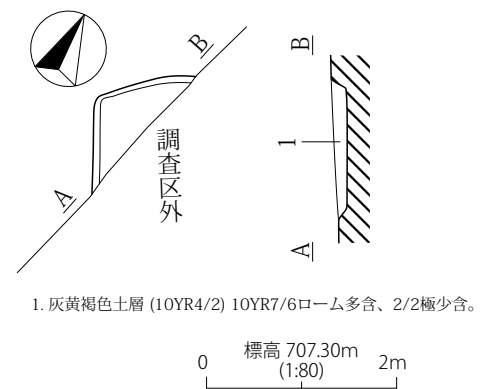
以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代のⅠ・Ⅱ期に比定され、8世紀前半の実年代が想定される。

●H 12号住居址 (第 14 図)

本址は調査区東端中央付近で検出された。H5・6・9、D6に切られる。東・西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.20mの規模である。ピットは5基検出されたが、支柱穴は判然とししない。調査範囲にカマドは存在しなかった。

遺物は底部回転系切の須恵器坏が1点出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代のⅤ期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

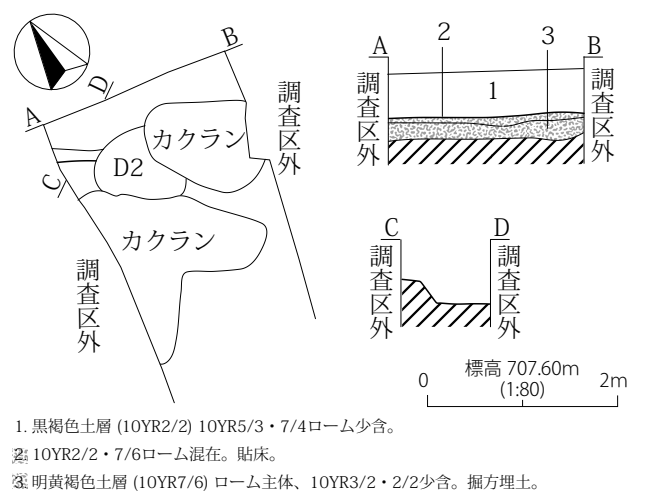


第 12 図 H 10 号住居址

●H 13号住居址 (第 15 図)

本址は調査区東端中央付近で検出された。H7、D3～6に切られる。西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.29mの規模である。ピットは2基検出されたが、支柱穴ではなく、所謂「壁柱穴」と思われる。調査範囲にカマドは存在しなかった。壁下には周溝が巡る。

遺物は土師器、須恵器、石器が出土している。土師器は内面ヘラミガキ後黒色処理の坏片であり、外面には判読できない墨書が認められる。須恵器



第 13 図 H 11 号住居址

も坏であり、底部には回転糸切痕が看取される。石器は磨石と磨・敲石が出土している。

以上の出土遺物から、本址は聖原編年の奈良・平安時代VI期に比定され、9世紀代後半の実年代が想定される。

## 第2節 土坑(第16図)

6基検出された。D1・2は判然としないが、他は中世の所産と思われる。D4・5からは土器が出土しているが、重複するH13に帰属するものと思われる。

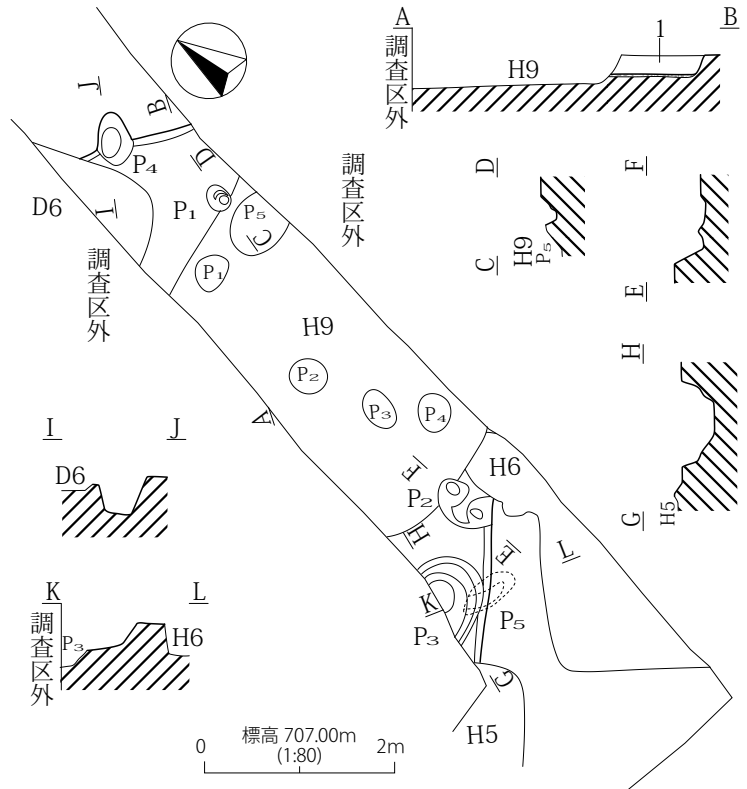
## 第3節 ピット(第17図)

8基検出された。詳細は一覧表を参照されたい。

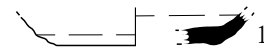
## 第4節 溝址(第18図)

1条検出されている。調査区西端を北から南に走っている。

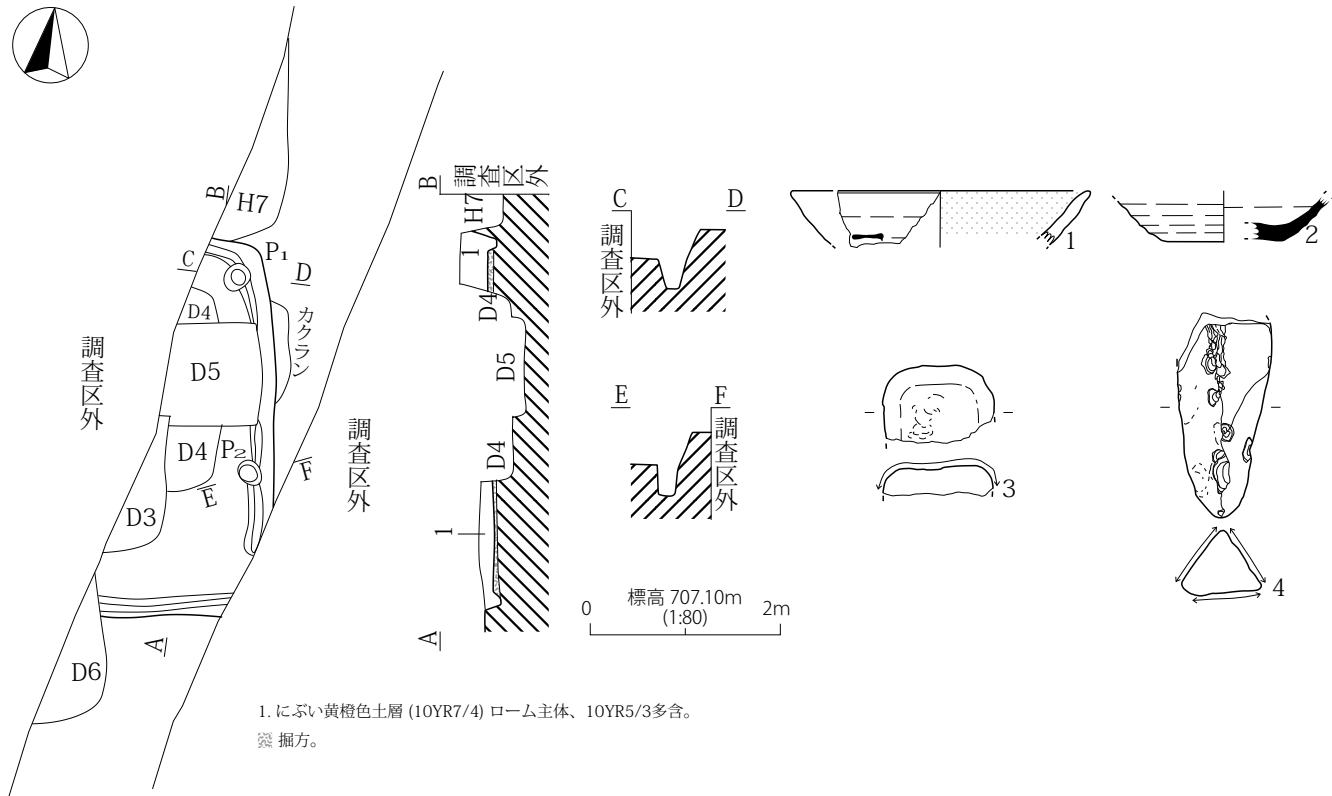
遺物は土師器、弥生土器、石器・石製品が出土している。土師器は内面黒色処理の坏片であり、外底には右回転の糸切



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/6ローム少含。密掘方。



第14図 H12号住居址



1. にぶい黄橙色土層 (10YR7/4) ローム主体、10YR5/3多含。密掘方。

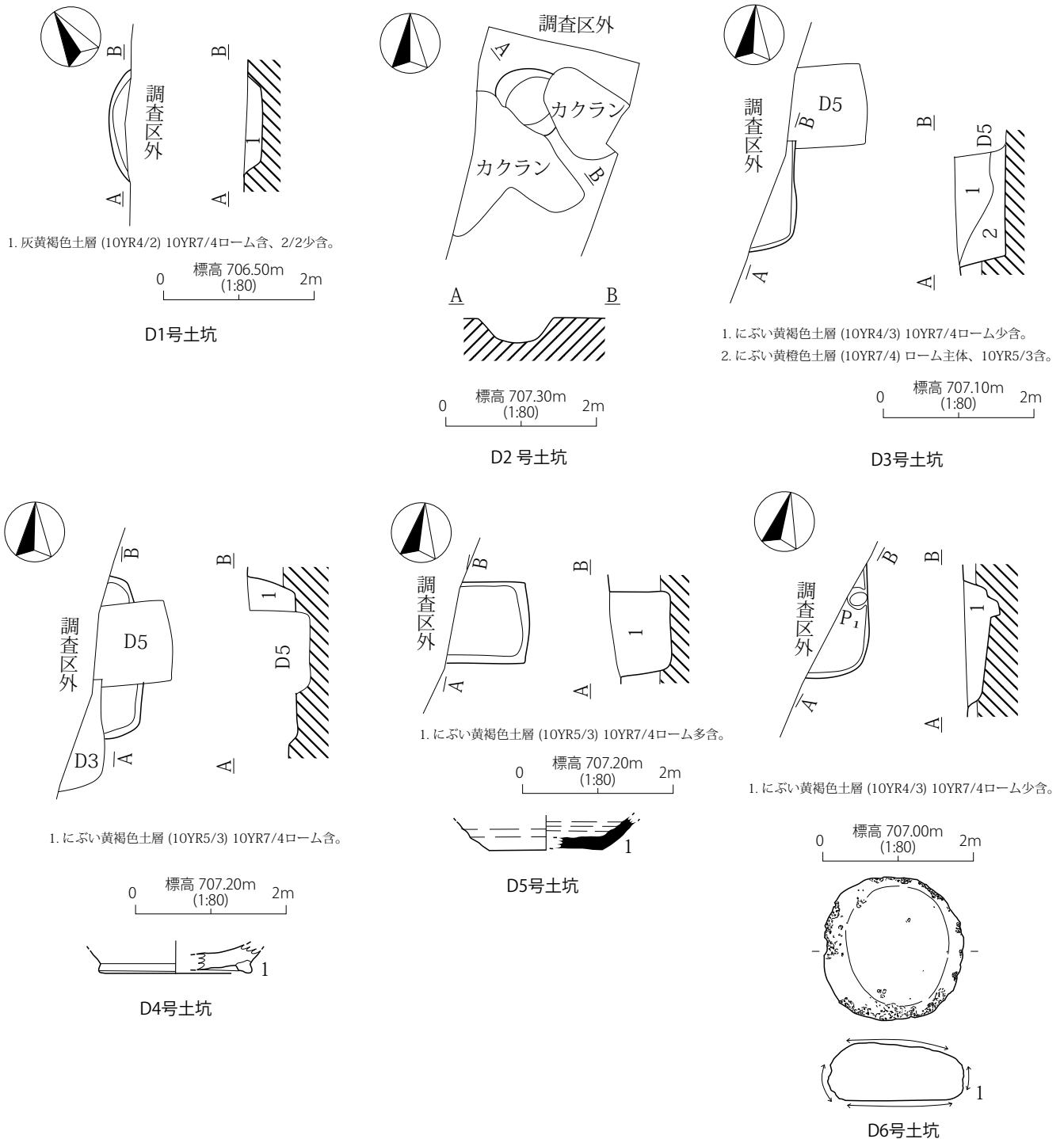
第15図 H13号住居址

痕が残される。弥生土器は壺の頸部片であり、施文範囲を除き赤彩が施される。石器は打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石が各1点出土している。石製品は五輪塔の空輪部が出土している。弥生土器及び石斧は重複するH1・2号住居址に帰属するものであろう。

以上の出土遺物から、本址の時期は平安時代以降と考えられる。

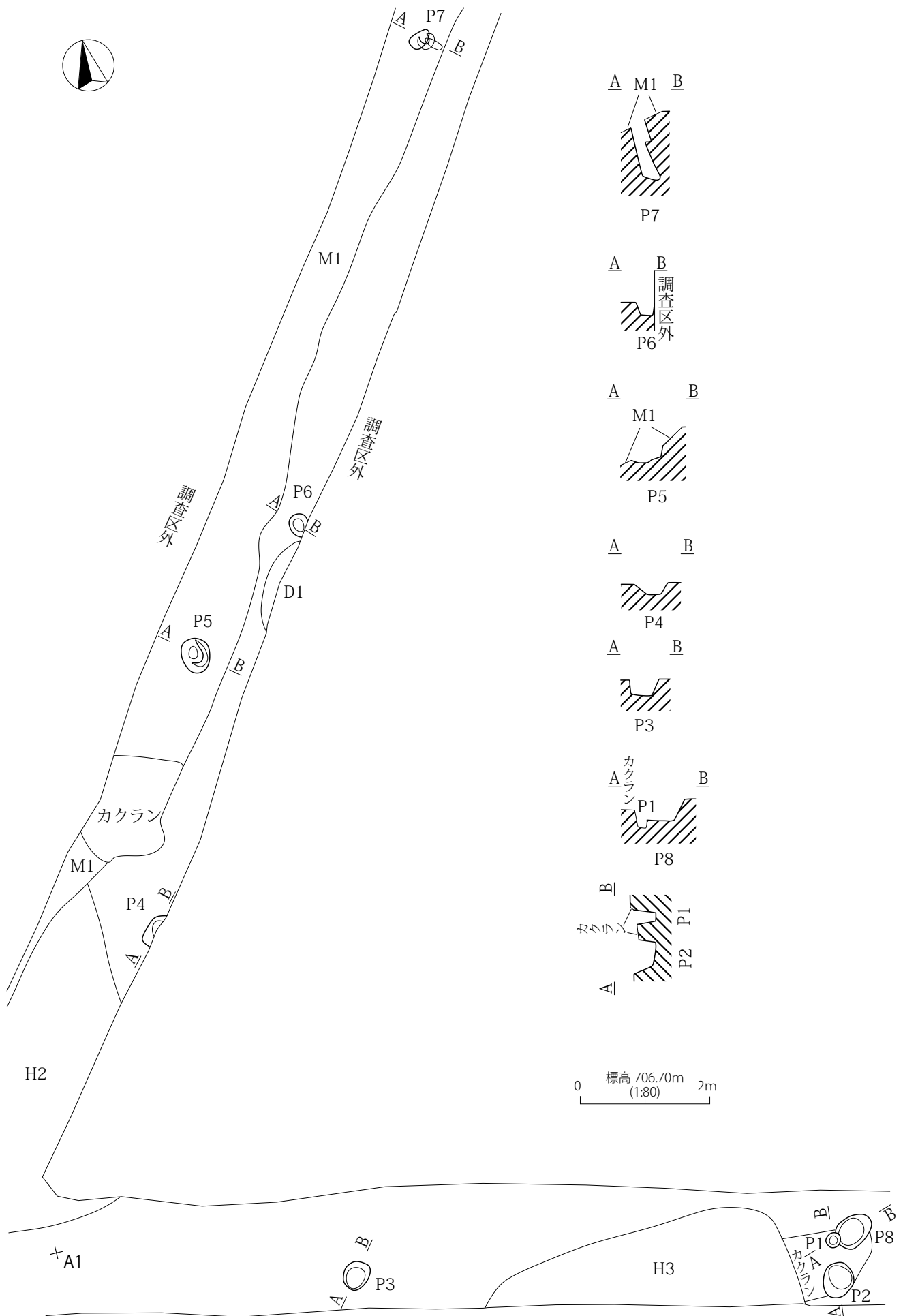
### 第三章 まとめ

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代後期、奈良・平安時代、中世のものであった。南西に隣接する大豆田遺跡Ⅵから続く集落と、東から展開してくる道常遺跡の中世遺構群が重なり合う地点が大豆田遺跡Ⅶである。擁壁部分の調査であるため、個々の遺構は断片的な調査しかなされていないが、濃密に分布する遺構の存在が確認された。

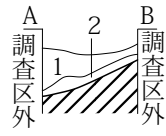
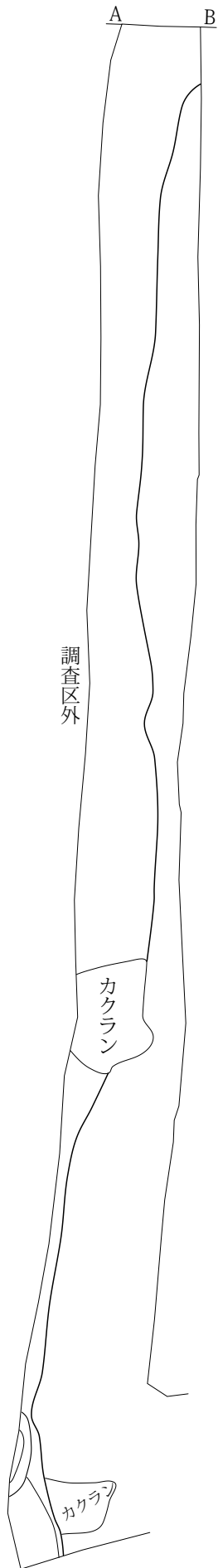


第 16 図 土坑

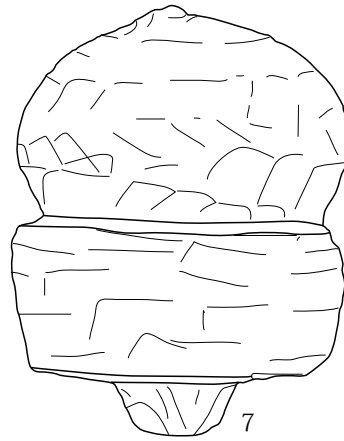
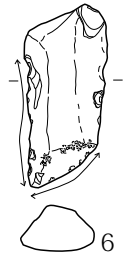
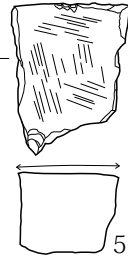
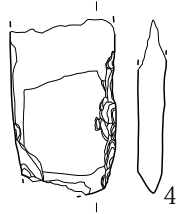
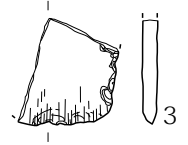
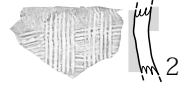
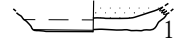
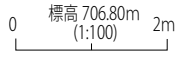




第 17 図 ピット



- 1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/4ローム極少含。
- 2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/4ローム多含。



第 18 図 M1 号溝址

第1表 住居址計測表

遺構名	重複関係	主軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	ピット	付属施設	備考	時期
H 1	M1に切られる。	—	—	—	0.11	1	—	—	弥生後期
H 2	M1に切られる。	—	—	—	0.28	2	周溝	P2内から1・2・3・5が出土	弥生後期
H 3	カクランによる破壊を受ける。	—	—	—	0.44	1	周溝	北壁下からベンガラ	弥生後期
H 4	—	—	—	—	0.54	—	—	—	不明
H 5	カクランによる破壊を受ける。	N - 29° - W	—	—	0.11	2	土坑1	床下土坑内から1・2出土	平安時代
H 6	—	—	—	—	0.40	1	カマド	—	平安時代
H 7	H13を切る。	—	—	—	0.49	—	—	—	不明
H 8	—	—	—	—	0.10	—	—	—	平安時代
H 9	H6に切られる。	—	—	—	0.22	5	—	—	平安時代
H 10	—	—	—	—	0.16	—	—	—	不明
H 11	カクランによる破壊を受ける。	—	—	—	0.48	—	—	—	奈良時代
H 12	H 5・6・9、D6に切られる。	—	—	—	0.20	5	—	—	平安時代
H 13	H7、D3～6に切られる。	—	—	—	0.29	2	周溝	—	平安時代

第2表 土坑計測表

遺構名	重複関係	平面形態	長軸方位	長軸長	短軸長	壁残高
D 1	—	—	—	—	—	0.22
D 2	H11を切る。	楕円形	—	—	—	0.35
D 3	D5に切れ、H13を切る。	長方形	—	—	—	0.66
D 4	D3・5に切れ、H13を切る。	長方形	—	—	—	0.62
D 5	H13・D4を切る。	長方形	N - 80° - E	—	1.08	0.80
D 6	H13を切る。	長方形	—	—	—	0.31

第3表 ピット計測表

遺構名	重複関係	平面形態	長軸長	短軸長	壁残高
P 1	P8を切る。	円形	0.23	0.23	0.38
P 2	—	楕円形	0.56	0.47	0.35
P 3	—	楕円形	0.45	0.39	0.27
P 4	調査区外にのびる。	—	—	—	0.18
P 5	M1を切る。	楕円形	0.54	0.44	0.24
P 6	調査区外にのびる。	楕円形	—	0.30	0.22
P 7	M1を切る。	楕円形	0.35	0.22	0.95
P 8	P1に切られる。	楕円形	0.61	0.45	0.34

第4表 H 1号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	坏	13.2	6.8	3.4	—	火襷	回転糸切・火襷	回転実測	覆土
2	須恵器	甗	—	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	覆土
3	弥生土器	甗	—	—	—	—	ナデ	櫛描簾状文・波状文	破片実測・拓本	覆土
4	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	へら描矢羽根状文・赤彩	破片実測・拓本	覆土
5	弥生土器	壺	—	—	—	—	赤彩・ナデ	櫛描「T」字文	破片実測・拓本	覆土
6	弥生土器	壺	—	—	—	—	器面剥落	へら描矢羽根状文	破片実測・拓本	覆土

第5表 H 2号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	高坏	—	16.4	< 13.2 >	—	赤彩	ハケメ→ナデ	完全実測	No2
2	弥生土器	甗	18.0	7.8	24.5	—	ミガキ	櫛描簾状文・波状文	完全実測	No1
3	弥生土器	甗	(14.2)	—	< 9.3 >	—	ミガキ	櫛描簾状文・波状文	回転実測	覆土
4	弥生土器	甗	(17.5)	—	< 7.8 >	—	ミガキ	櫛描波状文・折返口縁	回転実測・拓本	覆土
5	弥生土器	甗	—	4.4	< 11.0 >	—	ハケメ→ナデ	櫛描簾状文・波状文	完全実測	覆土
6	弥生土器	甗	—	6.2	< 4.2 >	—	ミガキ	ミガキ	完全実測	覆土
7	弥生土器	甗	—	10.4	—	—	ナデ・ハケメ→ミガキ	櫛描波状文、ミガキ	回転実測	No3
8	弥生土器	甗	—	—	—	—	ミガキ	櫛描簾状文・斜走文	回転実測	No4
9	弥生土器	壺	9.5	—	< 5.6 >	—	赤彩	赤彩	完全実測	No5
10	弥生土器	壺	(30.0)	—	< 4.0 >	—	赤彩	赤彩	回転実測	覆土
11	弥生土器	壺	(30.4)	—	< 6.8 >	—	赤彩	赤彩	回転実測	覆土
12	弥生土器	壺	—	7.8	< 26.3 >	—	ナデ	平行沈線・櫛描波状文	完全実測	覆土
13	弥生土器	壺	—	—	< 21.5 >	—	ナデ・器面剥落	櫛描「T」字文、赤彩	回転実測	覆土
14	石器	石鏃	< 3.4 >	1.7	0.5	< 1.91 >	基部欠損、黒曜石	—	完全実測	覆土

第6表 H 3号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甗	—	5.0	< 5.6 >	—	ミガキ	櫛描波状文・折返口縁	破片実測・拓本	覆土
2	弥生土器	甗	—	—	—	—	ミガキ	櫛描簾状文・波状文	破片実測・拓本	覆土
3	弥生土器	甗	—	—	—	—	ミガキ	櫛描斜走文	破片実測・拓本	覆土
4	弥生土器	甗	—	—	—	—	ミガキ	縄文	破片実測・拓本	覆土
5	弥生土器	壺	—	5.0	< 5.6 >	—	ハケメ・ナデ・赤彩	赤彩	完全実測	覆土
6	弥生土器	壺	—	—	—	—	ミガキ	櫛描簾状文・ミガキ	破片実測・拓本	覆土
7	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	櫛描矢羽根状文・赤彩	破片実測・拓本	覆土
8	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	平行沈線・縄文	破片実測・拓本	覆土
9	石器	磨石	(9.2)	(4.2)	(4.2)	(240.0)	全周使用、下端欠損	—	完全実測	覆土

第7表 H5号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	12.1	6.4	4.0	—	ミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全実測	覆土
2	土師器	坏	(12.5)	(6.0)	(3.1)	—	ミガキ→黒色処理	右回転糸切	回転実測	覆土
3	土師器	坏	13.0	7.0	3.7	—	ミガキ→黒色処理	右回転糸切	回転実測	掘方
4	土師器	坏	(13.7)	—	<3.8>	—	ミガキ→黒色処理	ナデ	回転実測	覆土
5	土師器	坏	(14.4)	—	<3.5>	—	ミガキ→黒色処理	右回転糸切	回転実測	覆土
6	土師器	坏	—	4.4	<1.7>	—	ナデ	右回転糸切	回転実測	P2
7	土師器	坏	—	—	—	—	煤付着	煤付着、墨書「？」	破片実測	P2
8	灰釉陶器	碗	(15.8)	—	<3.3>	—	施釉	施釉	回転実測	掘方
9	土師器	ロク口甕	(24.8)	—	<6.0>	—	ナデ	ナデ	回転実測	掘方
10	鉄製品	釘	<9.1>	<1.1>	<0.4>	<12.8>	頭部欠損		完全実測	No1
11	鉄製品	釘	<2.1>	<0.45>	<0.45>	<9.1>	頭部欠損		完全実測	No2

第8表 H6号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	—	(8.0)	<2.9>	—	ミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	覆土
2	土師器	坏	—	(9.4)	<2.4>	—	ミガキ→黒色処理	回転糸切	回転実測	覆土
3	須恵器	坏	(13.8)	(7.0)	<3.7>	—	ナデ	火襷、ナデ	回転実測	P1
4	須恵器	坏	(14.0)	—	<3.5>	—	火襷、ナデ	火襷、ナデ	回転実測	覆土

第9表 H7号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	石器	編物石	11.5	4.4	4.0	250.0	—		完全実測	覆土
2	石器	編物石	14.3	4.8	5.0	400.0	左側に挟り		完全実測	覆土

第10表 H8号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	碗	(13.0)	—	<4.6>	—	暗文→黒色処理	回転糸切→付高台	回転実測	覆土
2	土師器	碗	14.6	6.4	6.3	—	ナデ	回転糸切→付高台	完全実測	覆土
3	土師器	ロク口甕	(24.1)	—	<11.0>	—	ナデ	ナデ	回転実測	覆土

第11表 H9号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	碗	—	—	—	—	暗文→黒色処理	回転糸切→付高台	回転実測	覆土
2	須恵器	坏	(13.8)	—	—	—	ナデ	ナデ	回転実測	覆土
3	須恵器	坏	—	(7.2)	<1.7>	—	ナデ	ナデ	回転実測	覆土
4	土師器	ロク口甕	(24.8)	—	—	—	当具痕→ナデ→カキメ	ナデ	回転実測	覆土
5	石器	磨石	19.8	6.0	2.3	500.0	磨面4		完全実測	掘方

第12表 H11号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	坏	—	(9.0)	—	—	ナデ	回転ヘラ切	回転実測	覆土

第13表 H12号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	坏	—	(8.4)	<1.8>	—	ナデ	回転糸切	回転実測	覆土

第14表 H13号住居址出土遺物観察表

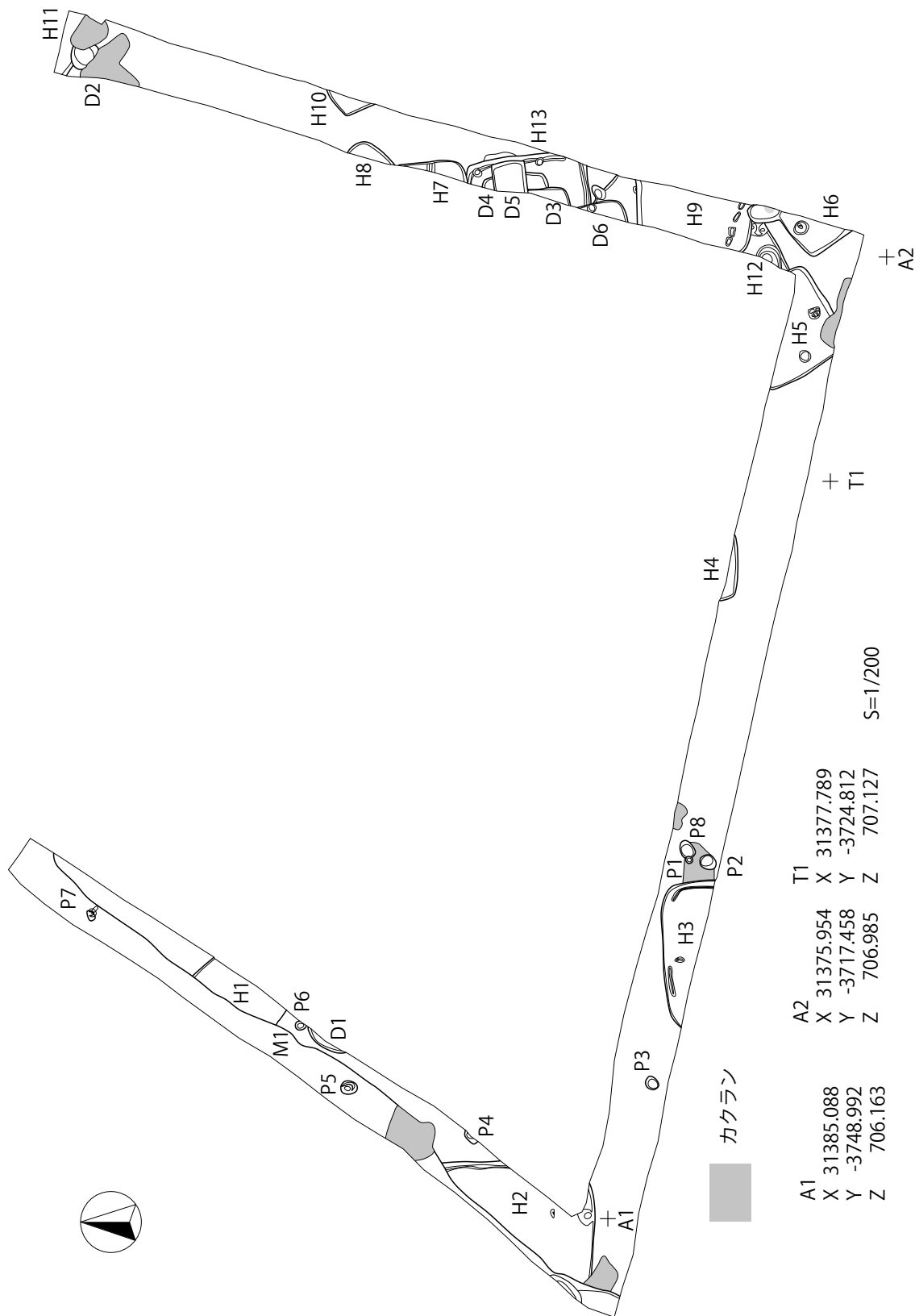
No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(15.8)	—	—	—	ミガキ→黒色処理	墨書「？」	回転実測	覆土
2	須恵器	坏	—	(6.2)	<2.4>	—	ナデ	回転糸切	回転実測	覆土
3	石器	磨石	(5.8)	(4.1)	<1.7>	(63.0)	全周使用		完全実測	覆土
4	石器	磨・敲石	(10.8)	5.0	4.2	(237.0)	磨面3、側縁に敲痕		完全実測	覆土

第15表 土坑出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	灰釉陶器	壺	—	(9.6)	<1.9>	—	自然釉	回転ヘラケズリ→付高台	回転実測	D4
2	須恵器	坏	—	(7.6)	<2.3>	—	ナデ	回転糸切	回転実測	D5
3	石器	磨・敲石	9.6	9.3	3.9	620.0	磨面2、全周敲打痕		完全実測	D6-No2

第 16 表 M 1 号溝址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整 面		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	—	(6.4)	< 1.3 >	—	黒色処理	右回転糸切	回転実測	覆土
2	弥生土器	壺	—	—	—	—	赤彩	赤彩、櫛描「T」字文	破片実測・拓本	覆土
3	石器	打製石斧	(5.7)	(5.4)	(0.8)	(35.0)	刃部磨滅		完全実測	覆土
4	石器	磨製石斧	(9.3)	(5.6)	(1.5)	(112.0)	両端欠損		完全実測	覆土
5	石器	磨石	(8.1)	(6.2)	(4.3)	(336.0)	磨面1、全周欠損		完全実測	覆土
6	石器	敲石	9.7	4.4	2.4	118.0	下端及び左側に敲打痕		完全実測	覆土
7	石製品	五輪塔	22.9	17.3	16.8	2840.0	鑿痕有		完全実測	覆土



第 18 図 全体図 (1:200)



H1 号住居址完掘



H2 号住居址完掘



H3 号住居址完掘



H2 号住居址遺物出土状況



H5 号住居址完掘



H4 号住居址完掘



H6 号住居址完掘



H7 号住居址完掘



H8 号住居址完掘



H9 号住居址完掘



H10 号住居址完掘



H11 号住居址、D2 号土坑完掘





H12号住居址完掘



H13号住居址完掘



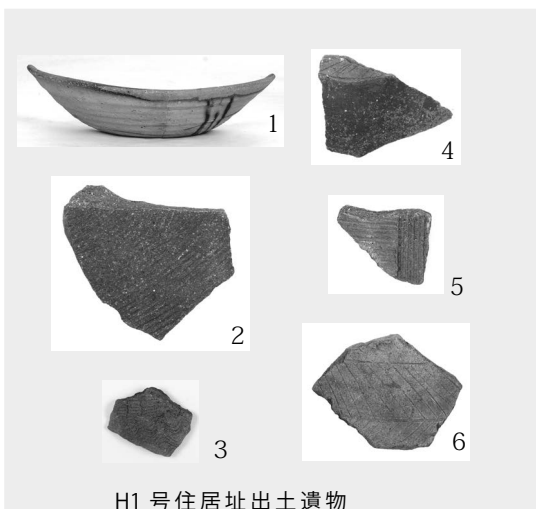
M1号溝址完掘



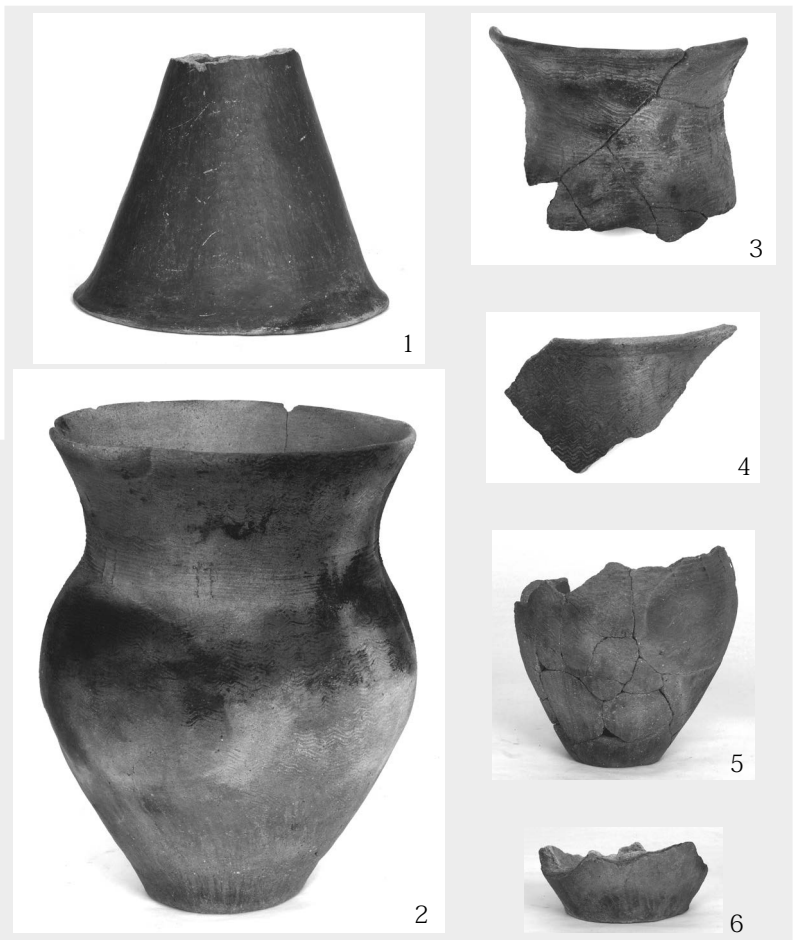
D1号土坑完掘



D3・4・5号土坑完掘

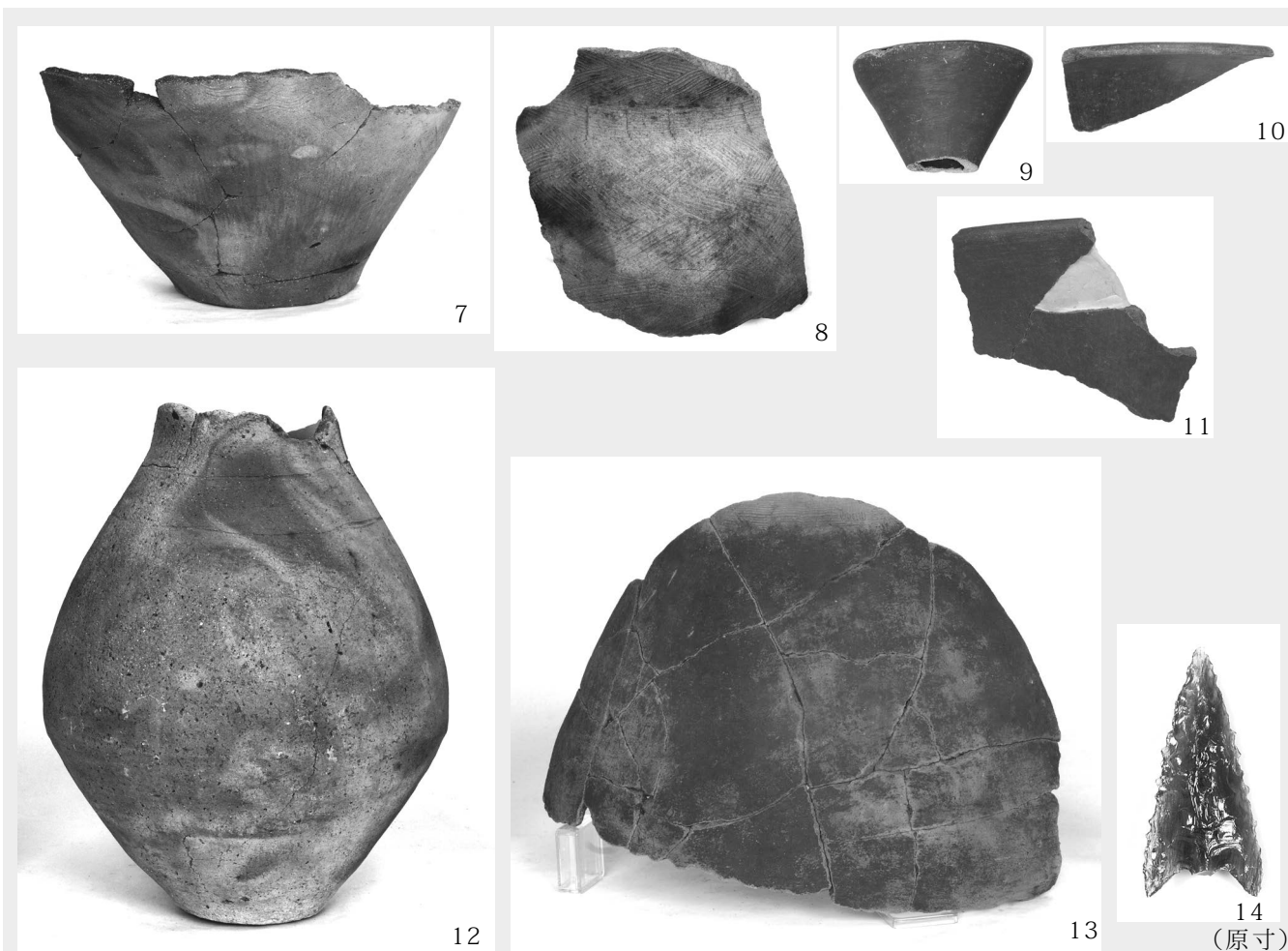


H1号住居址出土遺物

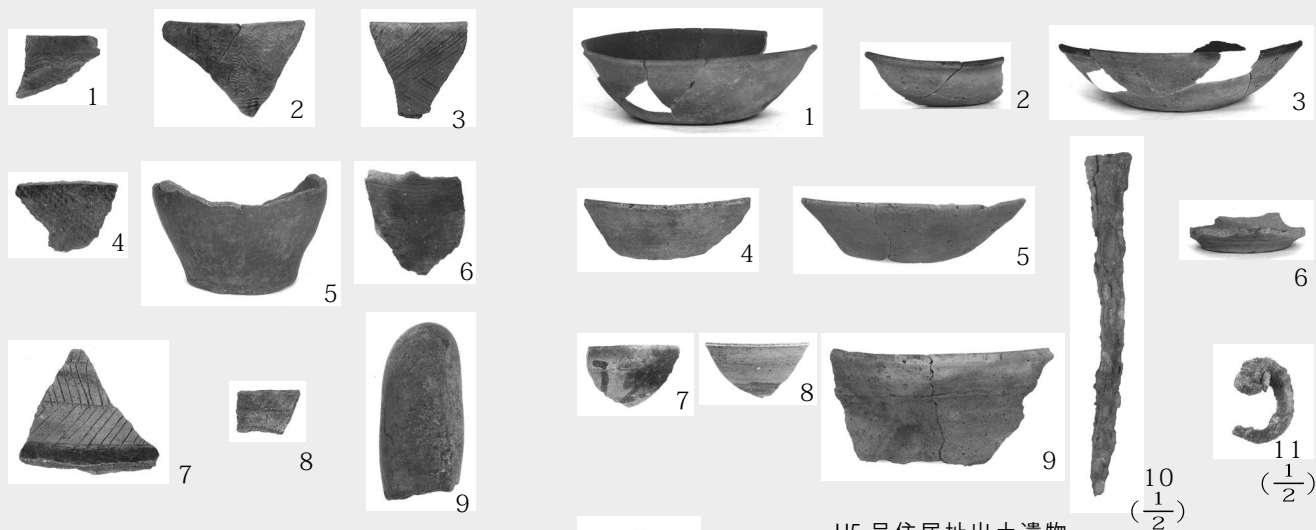


H2号住居址出土遺物(1)





H2 号住居址出土遺物 (2)



H3 号住居址出土遺物

H5 号住居址出土遺物



H6 号住居址出土遺物

H7 号住居址出土遺物

H8 号住居址出土遺物



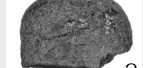
H9号住居址出土遺物



H11号住居址出土遺物



H12号住居址出土遺物



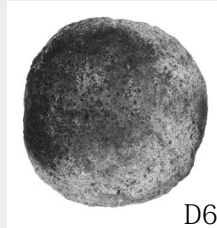
H13号住居址出土遺物



D4



D5

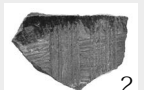


D6

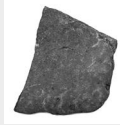
土坑出土遺物



1



2



3



4



5



6



7

M1号溝址出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	すほうばたいせきぐん だいずだいせきなな							
書名	周防畑遺跡群 大豆田遺跡Ⅶ							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 271 集							
編著者名	小林真寿							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込 2913 Tel 0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	令和 2 年（2020）3 月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	36° 16'59"	138° 27'31"	令和元年 7 月 16 日 ～ 25 日	145.8㎡	駐車場 整備
だいずだいせきなな	さくしながとろ	20217	7					
大豆田遺跡Ⅶ	佐久市長土呂 1737、 1738							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大豆田遺跡Ⅶ	集落址	弥生 平安 中世	竪穴住居址－13 軒 土坑－6 基 溝址－1 条 ピット－8 基	弥生土器 土師器・須恵器 灰釉陶器 石器・石製品・鉄器		—		
要約	南西に隣接する大豆田遺跡Ⅵから続く集落と、東から展開してくる道常遺跡の中世遺構群が重なり合う地点が大豆田遺跡Ⅶである。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 271 集

### 周防畑遺跡群 大豆田遺跡Ⅶ

令和 2 年 3 月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒 385-8501 長野県佐久市中込 3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒 385-0051 長野県佐久市中込 2913

Tel 0267-63-5321

印刷所 双葉印刷

